

---

# 玉川温泉での不思議な気持ち

キップル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

玉川温泉での不思議な気持ち

### 【Nコード】

N7855J

### 【作者名】

キップル

### 【あらすじ】

秋田の秘湯中の秘湯、玉川温泉に行ったときに経験した「気持ち」のお話。

えーっとー、僕はもともと「幽霊」とか全然信じてなかったのですが、

1992年9月に12時間に及ぶ大手術を受けた直後にある種の「臨死体験」みたいなことを経験しまして、

そのときに Reincarnation というか「生まれ変わり」を知りました。

「信じている」「んじやなくて、「知っている」といったほうが近いのです。

激痛の中で、僕は前世の僕と言葉によらずに会話しました。僕は泣きました。

幻覚だよと言われればそれまでなんですが…

ひとつだけ言えるのは、もし霊というものがいたとしても僕は恐くなくなつた、ということ。

もともとその類いには鈍感だったので、たぶん誰かが化けて出ても僕は「やあ」と言つような気がします。

ただし、悲しいかな僕は霊的な経験を、ほとんどしたことがなく、

「幽霊を見た」とか、

「正夢を見た」という話はひとつもできないわけです。

妹の旦那さんはなんかそういうのがあるらしく、僕の両親の家に来たとき、しばらくしてから、

「（あの方は）おばあさんですか？」と尋ねたそうです。祖母は亡くなつてすでに何年も経っていました。

彼がそういう能力を自分でちつとも重要と感じてないのがよく分かります（笑）。

まあ、彼はともかく、僕には霊的な能力がないらしいのです。

ただ一度だけ、「何かを感じた」というのが玉川温泉に行ったときのこと。

僕と連れ合い君の二人は、秋田の乳頭温泉で数泊したのち、寄り道（回り道ですが）をして、

ほとんど予備知識のない玉川温泉まで足を伸ばしたのです。

混雑を避けてわざわざ梅雨の時期に訪れたのですが、ここは人でいっぱいでした。

その日は曇天でしたが幸いにも雨は降っておらず、二人で岩盤浴をしている湯治客や、

周囲の風景を見たあと、入浴しようということになりました。

さて、引き戸を開けて広い室内に入ったとたん、僕は固まりました。中の光景でもなく、出来事でもなく、ただただ「雰囲気」に打ちのめされたのです。

まったくわけが分かりません。「えっ、これは何なの??？」としか言えません。

あえて言うと、「何かがある／ある」という感覚です。

見えないのですが、何かがそこに満ちているのです。

ほんと言つと、すぐに出たくてたまりませんでした。しかし、なんせ「有料」です。

無理して奥まで行って、ほんのちょっとだけ飲泉を試み、オエツとなり、

無理して源泉につかり、「ビリビリ痛いよーっ」と呻き、

ついにいたたまれなくなつて、10分も経たずに上がってしまいました。

とても不快だったのです。心臓バクバク。

そこにいた「存在」が、僕にはとても不安だったのです。

同時に感じたのは、デジャブに似た感覚でした。

僕はこの感覚を前に経験している、という確信。ここには来たことがあるという確信。

実際には何ひとつ見覚えはありませんが、「これは知っている」と

いう感覚だけがあるのです。

やせ我慢(?)していたのも、もう限界。

そそくさと上がって、連れ合い君を待つこと数十分、その長かったこと…。

ここだけのこと、早く彼女に上がって来てほしくてたまらなかったですよ。

とても不安で不安で。

あれが何だったのか、未だに分かりません。

玉川温泉は恐山のような「霊場」ではない(と思う)ですが、僕と同じように「何かを感じた」という人も、ネットを調べると少しはおられるようです。

「玉川温泉にもう一度行きたいか」と言われると、複雑です。

なんか嫌なのでもう行きたくないという気持ち半分、あれが何だったのか知りたい気持ち半分、ということになります。

劇的な展開もないし、他人に訴えることのできるエピソードもないのですが、

僕には「転生」と同じほど大きな経験でした。

世の中には何か、そんな見えないものがある／いるんだとあらためて知ったというか。

人間は新しいもの、見知らぬもの、見慣れないもの、認識できないもの、異質なものに出会うと、

それを否定しようとし、嫌悪し、恐怖し、無視し、なんとか排除しようとしています。

それは愚かなことだと思えます。不快なものから遠ざかるのは単細胞生物でさえできます。

(今日は本当はここから書きたかったのですが、あまりに前書きが

長いので改めて書きます)

愚かなままではプライドが許さないの、きっと僕はもういちど、  
玉川温泉に行くのだろうと、思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7855j/>

---

玉川温泉での不思議な気持ち

2010年10月9日04時22分発行